

中学生「平和大使」広島派遣事業に参加して

地域福祉課 ☎(45)6228

平和の大切さを伝えていくために、中学生「平和大使」8人を広島に派遣しました。中学生「平和大使」が広島で学んだことや感じたこと、平和を継承していくために必要なことをまとめた作文の一部をご紹介します。

ヒロシマが教えてくれた 僕たちのすべきこと

大府南中学校二年 城 知希



僕は広島平和記念資料館で見た資料と実際に被爆した方の講話をもとに、平和について考えていきたいと思っています。

一つ目は、資料からです。資料館には、被爆した方の持ち物や、8時15分で止まった時計などがありました。また、被爆時に書かれた手記もありました。それらの中で一番多かった言葉は、「一瞬ピカッと光り、その後ドンと大きな音がした。何が起こったのかよく分からず、茫然としていた。」という言葉です。それを讀んだ僕は、原爆は恐ろしい兵器だということに改めて実感しました。ほんの一瞬で、人の生活を奪う原爆、それは大人から子供までの生きる権利を一度で無くせるほどのものなのです。当時、広島には130万人ぐらいの人が住んでいました。しかし、原爆で約14万人の人が犠牲になったのです。(中略)被爆した人は、いつか病気を発症して死んでしまうのではないかという不安を抱きながら一生を過ごさなければならぬのです。そんな兵器は、今すぐにでもこの世界中のどこから無くしてしまふべきだと思います。二つ目は、被爆者の方の話からです。僕たちが話を聞いたのは、清水弘

士さんという方です。原爆が投下されたとき、この方はまだ3歳でした。3歳で被爆したにもかかわらず、清水さんが覚えていることがあるそうです。

それは、お母さんが必死になって自分を助けてくれたこと、きのご雲の下に大きな火柱が立ったこと、そしてお父さんを探すために兄とたくさんのがれきの上を歩いたことだそうです。(中略)たった一発の爆弾で街は地獄絵図になってしまったのです。しかし、その後の人々の助け合いは、とても素晴らしいものでした。広島市民は自分たちで、道路や橋を復旧したり、廃墟の中にバラックというものを造って、その中で生活をしたりしていました。その力強い地道な努力があったからこそ、今の広島市があるんだと感動しました。しかし世界では、今でも原爆や水爆の保有国がたくさんあります。(中略)一刻でも早く核兵器がなくなれば、広島や長崎で被爆した方のような思いをする人がいなくなると思います。被爆した方々も「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」とメッセージを残してくれています。この期待にこたえるた

めにも、私たちのような子どもや若者が原爆がどれだけ残酷で、平和がどれだけ大切なものかを被爆者の方から聞き、次の世代に受け継いでいくことが、これからはとても重要だと思います。

「原爆の事実を絶対に風化させてはならない。この苦しみをもう一度繰り返してはならない」被爆者の方々は、このことをずっと繰り返し言っていました。過去は変えられませんが、未来は変えられるはずです。原爆の被害を受けた国だからこそ分かることはたくさんあります。それを僕たちがこの平和大使に任命されたことをきっかけに、より多くの人に伝えていけるようにがんばりたいです。その「伝える」という動きがこれから先、いつまでも続いて、いつか核兵器のない平和な世界が築けるように、次の世代、また次の世代と「平和の輪」を広げていきたいです。

中学生「平和大使」広島派遣 報告会を開催します

- ▼日時 9月2日(日) 午前9時半
- ▼場所 市役所201、204会議室
- ▼対象 一般
- ▼申し込み 当日直接会場へ。
- ▼その他 平和大使8人の作文「中学生広島派遣事業報告書」は、市ホームページ、アロップ、市内公民館でご覧いただけます。